

ゲゼル発達理論再考

新井 清三郎

は じ め に

ゲゼルの発達理論が形成されてから既に半世紀を経ている。その間に数多くの発達理論が発表され、時の経過とともにそれらの理論の意味がいろいろの角度から検討され、その評価も様変わりしてきている。ことにここ数10年の間の電子工学など科学技術の発展や人間遺伝学の研究の進歩によって人間発達に関する知見は10年をまたずして既に過去のものとなってしまう傾向がある。子どもの世紀と言われ、発達心理学や臨床医学の黎明と考えられた今世紀初頭の頃の発達理論は総て過去のものとして心理学のテキストの総論に記される運命にある。

ゲゼルの発達理論もこのような一般的な時の流れのなかに影が薄くなったかのようにみられがちであるが、それは正しいのだろうか。筆者はこの点について次の3点から敢えて再考をうながしてみるものである。

すなわち第1にゲゼルの理論の中心となる考え方が今に至るまで関係者に理解されていないこと、第2にゲゼル理論の現代における後継者の仕事がかならずしも広く知られていないこと、第3に機械化された社会におけるヒトの全人的発達という将来にわたる課題に対するゲゼル理論の意味が明らかになっていないことである。すなわち第1と第2とは人文科学と自然科学の専門性からくる理解の困難性にもとづくものであり、第3は未来の社会の予見の難かしさによるものであろう。

そこで本稿では現代におけるゲゼル理論の後を継ぐひとびとの歩みを発達診断、発達社会学、小児医学、発達心理学の各分野について概観し、次にゲゼル理論の中心に立つ「行動の胎生学」と発達診断とのかかわりを、ゲゼル理論の解説と併わせて述べるものである。

1 ゲゼルの研究を受継ぐひとびと

ゲゼルは多くの協同研究者とともに^{ほう}膨大な資料を集めて小児の初期から追跡研究を行った

ので、その資料はたとえ過去のものであっても、データによって構成された理論が過去のものとなったわけではない。それは彼の研究が多くの後継者により検証され、時代の変化とともにその各時代の持っている課題の解決に役立っているからである。

ゲゼルの研究の後継者は発達心理学・医学・生物学にかかわる幅広い分野にわたっている。以下にそれらの業績を概観してみよう。

(1) Knobloch, H. と発達診断学。

ゲゼルの発達診断学に欠かせられない2名の研究者が居る。それは Amatruda, C.S. と Knobloch, H. とである。前者は1941年に発刊された「発達診断学」第1版の事実上の著者であり、ゲゼルの協力者として研究の初期から参加している。行動発達の項目を詳細にわたって整理し記載した「小児の発達と行動」*に彼女の名がみられる。「発達診断学」については第一にあげられる人物であるが残念ながら若くして死去した。

注

- * 1. 「小児の発達と行動」(新井訳, 福村出版, 1982. (原題名は「小児行動の起源」*Infant Behavior, Its Genesis and Growth* である)。

Knobloch, H. は「発達診断学」を一貫した方法を用いて数千名の乳幼児につき40年にわたって検討している点で稀な存在であると言える。いうまでもなく子どもの行動発達は時代の変化とともにいろいろな点で微調整をしながら研究を進める必要がある。その一・二をあげるならば、発達カテゴリーについて微細運動と適応行動の外からみた類似性に対して発達上の意味を区別して考える必要がでてくる。たとえば拇指と示指の対向運動であっても、運動としての要素を中心としてみる場合と、「小球と瓶」の場面のように「容れ物」と「内容物」という関連性の理解という要素によってみる場合とで異った意味が生ずる。そこで単に「運動」という領域に統一していた行動を粗大運動と微細運動に分けるとともに、運動の一部を適応行動に組入れることも必要になる。このような行動領域の変更は第2版(1947)の刊行後約30年という長期間の臨床経験によって第3版(1974)の「診断学」に於て明示された変更である。

次に小児行動の発達促進および遅滞である。小児の体格が変化し、生育環境が大幅に変ってきた場合に当然行動発達の内容が変化してゆくことが考えられる。このことは単に身体的な面では促進または遅滞と言って良いが行動発達の面では、同じ年令でより成熟した年令層の行動に移ることが必ずしも「促進」と言えるかどうかは疑問で、行動の全体としてのまとまりが見られるかどうかという点で理解せねばならないであろう。促進・遅滞と言うよりは変容と言ったほうが良いかもしれない。いずれにしてもこのような微妙な変化は長期間にわたり同一検査法による、出来れば同一の検査者の行う追跡研究が不可欠である。しかもこの

ような20年、30年にわたる研究は事実上不可能に近いのであるが、Knobloch,H.は敢えてこの困難な追跡を行って時代による行動変容の状態を跡づけている。被検者の居住地がボルチモアからニューヨークと変っているが、検査者と検査方法が同一であるという条件を守っていることがデータの最大の強みである。

1980年に発刊された「発達診断マニュアル」*によって2・3の例をあげてみる。

注

* Knobloch,H. (新井清三郎訳)「発達診断マニュアル」, 日本小児医事出版, 1983。

「促進」について2・3興味のある点をひろってみると以下のようになる。(「マニュアル」, p.299, p.302)

適応行動：今日の乳幼児は約10%早く行動に到達している。しかし行動の流れ、過程は殆んど変化していない。

粗大運動：約17%の促進が認められ、行動の流れも相当変っている。

微細運動：序列には変化はない。しかし塔づくりが早くできるので、5% (56週～36ヵ月) だけ僅かに促進している。

言語行動：促進は約12%である。しかし言語行動には表現と受容との区別をしたりした変更が加えられたために、純粹の促進かどうかは疑問である。

個人社会行動：16%の促進が認められる。この行動は殆んど総て生育史の情報に基くものであるが、しかし他の領域で生育史と観察結果とが一致しているので、その情報はまず正当であろうと考えられる。

(2) Pasamanick,B. (疫学と神経心理学)

ゲゼルの研究はイエール大学の研究室を中心にして（後にゲゼル研究所）行われたいはば統制された研究であるとするなら、その後を引継いだ Pasamanick は疫学的にこれを発展させたものと言うことができるであろう。

すなわち「微細脳損傷」の概念をはじめて記したひとりとして、彼はボルチモア地区の40週児を対象にして行動発達の面から出産時脳損傷の行動面への影響を追求したのである。神経反射学的な病理からだけでは発見できない微細な損傷（正確には機能不全であって、脳の病理的欠損を必ずしも意味するものではない）を診断するという試みにいどんだのである。微細脳損傷の概念はその後多くのひとびとによって多様な考え方が提唱されて必ずしも明白に統一された考え方になっているわけではないが、彼の研究は直接乳児を正確に行動の面からとらえている点が重要であるといえる。

次に黒人と白人との乳幼児の行動発達を比較することによって人種間の行動面での差異を明らかにした研究がある。行動発達に人種間の差が本来存在するものかどうかはアメリ

カ社会で解決を迫られる切実な課題でもあるが、年長児や成人のように既に環境の影響を長年受けているわけではない乳児および幼児初期を対象にすることによってこの問題に対する解答が出される。結論を簡単に記すと、乳児および幼児初期に於て行動発達として上記の人種間の差はみられない、しかし親の教育程度（同じ学歴でもその内容は必ずしも同じではないが）の差ならびに環境要因が発達差を将来生むものであると言う。

この問題は別な観点からアフリカで行われた Geber, M. (フランスの精神医学者) がゲゼル検査によって追跡した研究によっても裏付けられたものと言える。すなわち Geber, M. はアフリカ土着の同じ乳幼児でも地域の生活状況の差によって行動発達の差が出てくるものであるという事実を見出している。

Pasamanick, B. は小児精神医学者であり同時に小児医学者であるし、精神医学的疫学研究が容易に遂行できるという有利なジョンズホプキンス大学の周辺のフィールドを活用した（彼の小児発達に関する史的概説は「新発達診断学」¹⁾の序文に述べられている）

彼は後にオハイオ大学に移り、同大学から刊行されている乳幼児の行動発達の研究フィルムは神経系統の発達と行動とを統合的にとらえようとする試みを示している。

彼の研究の基本は小児を医学・神経学的な病理と同時に社会病理という面から統合的にとらえようとするものである。このことは決して容易ではない。医学・神経学的にアプローチしようとすればすでに精神病理や社会病理の面は把握がたくなるし、またその逆のこともある。これを両立させることは専門領域からもまた方法論的にも問題が大きい。この課題に正面から取組んだのが彼の独特な点であり、社会病理や疫学に優れた実績のあるジョンズホプキンス大学の良い土壌がそれを培ったものともいえよう。

現時点では小児発達の疫学研究は更に新しい方向づけが必要になっている。それは約20年以前から全世界的な規模で行われている国際交流による小児発達のプロジェクトへの参加であろう。あるいは Washburn, W.* の創始した人間発達の追跡研究への行動発達の面からの協力であろう。

注

* Washburn, W. コロラド大学、小児発達研究所の創設者。

(3) Illingworth, R.S. (小児医学)

ゲゼルの研究成果を小児医学に生かして一生の課題にした小児臨床医学者がアメリカから出なかったのはなぜだろうか。このこと自体ひとつの興味ある課題になるかもしれない。力動的精神医学や精神生物学 (psychobiology) というような精神力動に強い関心を持つ精神医学者や心理学者にとっては情緒面へのふみ込み方が不十分と思われがちな行動発達研究には関心が薄かったのかもしれない。またこのことは心身の相関関係に関心の深い小児

医学者にとっても同じであると考えられる。しかしこれらの外にも理由があるのかもしれない。現にゲゼルの後任のエル大学小児医学の教授は Senn,M.J.E.であって、前任者の研究とは全く方向を異にした小児精神医学の分野のひとつであったのは何故であろうか。

ゲゼルの小児医学の後継者と言えるのはイギリスの Illingworth,R.S.教授である。彼は行動発達研究を小児臨床医学の場に生かして、ことに正常児の発達について多くの著書を出している。

しかし彼のこの方面に関する著書はいわば小児医学に関する啓蒙書とでも言ったものであって、発達の理論的側面あるいは発達の哲学という基本的な問題には解れていない。

もっともそうであったからこそ、またゲゼルの行動発達理論の応用の分野に止っていたからこそ一般の小児医学者にも、また心理学者にも安心して迎えられ、彼の著書が永く用いられたという観方もできるかもしれない。

(4) 発達心理学にかかわるひとびと

発達心理学の関係では特定の後継者をあげることが困難なのは、この分野ではかわりかあまりにも深いということの意味している。したがって以下にあげるひとびとが必ずしも代表的な後継者とは言いかねるかもしれない。

ゲゼル研究所の所長をゲゼルから引継いだのは Ilg,F.L.であるが、同氏は発達研究の初期からの協力者であり、主に啓蒙的な分野で研究を続けていた。たとえば Child Behavior²⁾は主にラジオ放送の記事をまとめたものであり、コンパクトに発達論の具体的応用を示したものと言える。また Infant and Child in the Culture of Today³⁾は「乳幼児と現代の文化」のひろく読まれている初版から40年を経て、あらためて現代の乳幼児の生育環境の変化に即してゲゼルの発達論を確認したものであり、この方面での里程標を示したと考えられる。

Ames,L.B.の Child Rorschach Responses⁴⁾は乳幼児初期から学童期に至る Rorschach 反応の変化を示したものである。このような低年齢で正確なデータを出すための基礎は長年の被検者親子と研究所の緊密な人間関係が無ければ不可能である。なおその後わが国でも乳幼児の同反応は小沢牧子によって「子どものロールシャッハ反応」⁵⁾の好著となって発表されていることをことわっておく。

Griffith,R.の Abilities of Babies⁶⁾は生後24ヵ月までに限定した発達テストであって、イギリスおよび英語圏でひろく用いられている。

ドイツでは現在ではなお Bühler,Ch. のテスト（1932年の初版以後現在では第4版の小冊子⁷⁾が出版されている）が用いられている。このテストは本来個々の項目については別として、テストの基本的構成と考え方はゲゼルとは異なるものであって、同じ意味で発達を評価するのは誤りである。

Getman, G.N.は心理学者ではないが、視覚障害児の訓練に独自の寄与をしたひとである。彼の発達についての発想はゲゼルのもとで視覚障害児および正常児の視覚の研究をした若い時の経験がその後結実したものである。（「視行動の発達」のゲゼルの著作の協力者として彼の名がみられる）。

なおここでゲゼルの著書のなかでわが国にひろく知られている「狼の子」⁹⁾について一言しておく必要がある。この書物は発刊当時はその内容の目新らしさと容易に読み易い小冊子であるためによく話題にされるが、これをもってゲゼルの発達観を知ることができるものではない。いわばゲゼルの著書のなかでは側役として位置づけられるものである。

2 「行動の胎生学」

(1) 「行動の胎生学」の位置づけ

ゲゼルの20冊以上にわたる著書のうちで「行動の胎生学」⁹⁾は独特の位置づけがされるはずである。すなわち一般の発達心理学者のとかく見落しているゲゼルの発達哲学の多様な面を総論的に述べていることである。ゲゼルはしばしば心理学者であると言われるが、その一方では医学者であるとも評される。奇妙なことにわが国では医学者はゲゼルを前者として、また心理学関係者は後者として評することが多い。そのいずれの場合にも、むしろゲゼルを理解していないために深い根拠なしに、評者の認識不足をカバーするためにそのように言って済ませているのであるから、この問題をことさらにとりあげる意味は無いかもしれないが、いずれにしてもゲゼルの発達観に対する専門関係者の誤解を解く必要があろう。そのためには他の著書以上に本書をとりあげることに意味がある。

筆者がゲゼル研究に手をつけてから既に30年になる。（「発達診断学」の訳書の発刊は昭33である）。その頃から「行動の胎生学」をわが国に紹介する必要があると考えていた。しかし本書がようやく日のめをみたのはその後長い年月を経ている。それはひとつには、いわゆる年令的発達段階を判り易く記した一連の著書、「乳幼児」「学童」「青年」の各期の「心理学」の訳書が発刊され、手軽に読めるという点から安易なゲゼルの理解（？）の仕方が定着してしまったことにある。「胎生学」のような基本的な発達観を総論的に、ことに心理学関係以外の読者層にも紹介することは困難であるという事情が伏在していた。

ところで「胎生学」の説いている主な論点は何であろうか。それがすなわちゲゼルの発達観の理解の鍵になるので以下に順を追って述べる。

(2) トーヌス

「胎生学」では行動の芽生えの中心概念を「トーヌス」に置いている。「心は動き（運動）である」というような一見奇矯に響く表現も、その動きをトーヌス（筋緊張性）という言葉で置きかえるなら納得できるはずである。すなわち神経線維の先端が分裂増殖する生物学的現象を動きとしてとらえ、それによって個体の微細な部分・部分が「発芽」してゆく状況をトーヌスの形態的な姿でとらえるならば、それがひいては胎内で發育してゆく胎芽→胎児の動きであると無理なく理解できるであろう。

脊椎の周囲にある発生的に古い軸性筋の發育がひいては胎児→乳児の姿勢 (posture) に関与しているし、さらにポーズをとることが次第に中枢から末梢にひろがって体幹の粗大運動から指の微細運動に發展してゆく過程をトーヌスの点から考えることもできる。またこのような動きは単に目にみえる動作だけでなく、瞳孔のミクロの筋線維の活動や声帯にかかわる神経線維の發育としてみるなら、まなざしや発声という行動まで包含して考えることもできる。さらに神経反射や臨床診断にかかわる t・n・r (緊張性頸反射) や片側優位 (laterality) の点もトーヌスをもとにして理解できるはずである。

(3) Coghill, G.E.¹⁰⁾の研究

行動の發育は断片的な個々の神経反射が次第にまとまって統一した行動となって現われてくるものであるというような考え方は一見もっともらしくみえる。ことに胎芽の初期のアメーバ様な動きを皮相的にみるとそのように考えられよう。しかし今世紀初頭に行われた神経生物学者 Coghill, G.E. の行動とその解剖学的基礎の実験は細胞レベルの神経線維活動の規則性をみごとに説明している。

本稿としては詳細にわたり過るかもしれないが基本的なことなので彼の研究を筆者なりに解釈して次に記す。(詳細については文献¹¹⁾参照)。

Coghill はアムブリストーマ (山鰩魚に似た両生類) の脊髄の神経細胞を研究して次のことを発見した。すなわちこの細胞の特徴は外部から受取る刺激 (外刺激受容器による) と自分から出す刺激 (自己受容器による) というように、両方の性質の刺激を調和を保ちながら發生させ、受容するという機能を持っている。神経細胞や神経線維は刺激の伝導路としての機能のみを持っていると考えられがちであるが、その細胞自体が独立して、いはば「判断する」ことができるという事実がこの細胞でみられるのである。

(4) 行動發育の生来の統合性

この問題は次に続くゲゼル理論に深いかかわりを持つので、次に Coghill, の言葉を記す。¹²⁾

「…どんな学習の定義が採用されようと、また心理学的分析においてその概念がどの

ように制限されようと、学習過程は身体活動の全体的パターンとみなされるべきであって、神経系のある限られた部位の局所的刺激機能ではないということである。高等な大脳皮質を持つ動物における学習は顕著な特徴を持っているが、しかしこれらの特徴は偶発突然変異として突然におこったものではない。これらは原始的原形質の基礎的な属性にその源泉を求めることができる。

…脊椎動物の行動発達で知られている限り、総ての反射は一般に最初から完全に統合されていて、拡大し、生長しつつある全体的パターンのうちの部分的あるいは局所的パターンとして現れる。それらの反射はただ外見上部分的または局所的になるに過ぎない。それらは全体的パターンの生来の構成要素であるが、またはその支配下にあるものである。一方本能的反応作用は明らかに活動の全体的パターンである。たとえば新生児の騒音に対する反応の始まりは小児の恐怖の本能とみなされ、まぶたへの接触に対する反応は反射と考えられている。しかし生後10週目ぐらいの胎児では、まぶたへの接触は両脚の運動を伴っている。これは非常に広範囲の反応であって、延髄と脊髄をふくむというように、実際はそれら全体にかかわっている。それは本質的には幼児の突然の騒音に対する反応の始まりと同じである、しかし小児の反応は本能と称されているが、胎児のそれは反射的とみなされている。けれども、二つともその反応は本来全体的反応である…」。

(5) 行動の体 (corpus)。

ゲゼルは Coghill のように神経生物学者ではなく、はじめからヒトの小児の行動にいわば臨床的に迫っていった学者である。しかし映写分析によって行動発達を追求していった末に構成した理論には Coghill の実験的神経発達理論に完全に一致するものを見出したのは偶然ではない。

ヒトの胎児の行動研究は下等動物の生物学的実験と異って、その対象の性質上極めて限られた臨床観察によらざるをえない。しかしその限られた対象と研究方法によって得られた多くのデータを分析して、さらに Coghill の実験に触発されて(と筆者は考えるが)行動の基本に行動の体 (corpus) という概念を立てている。すなわち彼は言う…

「成長は漸進的な分化と統合との過程であり、それは行動の体 (Corpus) をつくりあげる。その体とは活動体であり、個人の活動傾向をその「種属」の成員として決定するものである。この体は力動的な形態学を持っていて発達の原則によって支配されている。7つの密接に関連した原則が区別できる。これらの原則は一般に「種属」の発達傾向について適用され、特に人間行動を多様にしている個人差の多くのものに当てはめられる

¹³⁾
…」。

「行動の体 (corpus) の中心は有機体の永遠の進化過程で徐々につくりあげられ、人間の個体発生で再び出現する古代からの運動組織である。その組織は古い癩れたものではない。それは胎児や小児に、子宮内外両方の環境に対して運動として適応する生きた枠組を与えるものである。それは姿勢、移動、把握、操作、材料使用と構造的な一次的な型を植えつけるものである。

この原始的な運動機関はより高い文化的な適応・情報伝達・社会的な行動のなかにくみ入れられてきた全体の活動組織の部分として引続き働きつづけている。

これらのより高次の序列もまたまず進化過程で形成され、胎生学 (個体発生) 過程を通してのみ生き続ける。どれほど最終的には文化適応の刻印が押されていようとも、学習は本来成長である、その創造的行動は子宮内外の旧くからの運動組織の能力を形づけているのと同じ種類の神経系の成長に依存している」。¹⁴⁾

3. 「発達診断学」について

ゲゼルの「発達診断学」の初版が1941に刊行されて以来、1974の第3版にいたる間の経緯についてはさきに述べたが、筆者が原書第2版をわが国で刊行するに当りゲゼルがこれに深く期待していたことは彼の筆者宛への便りでもわかる (その便りは「行動の胎生学」の巻頭にかかげてある)。

このようなゲゼルの期待にそって、「発達診断学」の持つ本来の意味は理解されているのだろうか。その後多くのいわゆる「発達診断法」が世に紹介され、各々がそれなりの利用価値を持っているはずであるが、ともすると簡便な臨床上の応用を重視し過ぎて、結果としての数値にこだわったり、本来流動的な小児の行動発達を固定したものと考えたり、あるいはテストの持つ意味をとりちがえて、結果的には検査自体を意味の無いものにする傾向がある。

次にゲゼルの行動発達診断の最も重要な点をふたつだけ記してみる。

(1) 個々の行動要素と行動発達の流れ

行動発達診断の検査法の源流をたどると結局ゲゼルと Bühler, Ch. になる。もっとも Bühler, Ch. は1932に Kleinkindertests を発表するに当って既にそれまで発表されていた (1925以来) ゲゼルの項目を参考にしながら検査法を作成したわけであるが、いずれにしてもヨーロッパにおける Bühler (Karl Bühler とともに) の知名度からしてこの検査法は無視できない。またわが国でも戦前 (1945以前) におけるドイツ系統の心理学の優位のために Bühler の発達心理学に占める役割は大きかった。しかし本来 Bühler とゲゼルの検査には大きな、と言うよりは根本的な発達観の差がある。

すなわちゲゼルの場合には行動発達とは統合された全体像としてとらえるべきであると考え（すでに前項においてその基本的立場については述べた）のに反して、Bühler のそれは感覚・知覚その他の能力別にはば分析して、その行動を解釈できるという立場で考えている。それで Bühler の検査では感覚・知覚・言語など6領域に分けたうえでその各々をプロフィールであらわし、各領域の発達年齢を別々に評価するような表現をとっている。このことは臨床的には便利であるし、またそのために現在に至るまでプロフィールによる各領域の数的評価をする方法をそのまま用いている発達検査が多い。

しかし翻って考えてみると、年長児は別として乳児期および幼児期に於て、このようないわば要素的な感覚・知覚的要因の優劣を各々独立に評価できると思うのは誤りである。問題は目の前にいる子どもがどのように「行動して」いるか、ということであって、その子どもが視覚的に、聴覚的に、また触覚的にどのような感じ方をして行動に表現しているか、というような分析それ自体には意味が無い。

言いかえるならばこのような分析不可能なことをあたかも可能であるかのように錯覚させるところに Bühler 検査法のおとし穴がある。しかもそのような錯覚の上に立った検査法が、その表現の安易さのために臨床家の間でもはやされ続けているとするなら（そのように筆者は考えるのであるが）、Bühler ならびにそれを踏襲した現在の多くの発達検査法は誤用されていると考えざるをえない。

それでは発達検査法とはどのようにとらえれば良いものであろうか。

基本的な考え方については前述したので、ここであらためてくり返すことを避けるが、理解しやすい表現をするなら「行動発達の流れ」のなかで子どもの行動をとらえるという一語に尽きるのではないだろうか。すなわち行動の「体」はその子どもの持っている独特の行動のあらわれであり、それは個々の能力であるよりも全体としての統合的な流れであると解釈できる。

問題はこのような流れは本来数量的な処理にはなじみにくいということである。すなわちゲゼルの行動発達検査は量的評価をすることよりも、より質的な評価をするべきものであり、数値よりも記述によって表すべきものである。すなわち止むをえず数量という仮の形で表現したものが発達系数というものであるという立場である。

ヒトの発達とは本来個々の独特なものであって、一般化し数量化すること自体無理なものであるという原点にかえて考えるならば、今述べたことはある程度納得できるのではないだろうか。

(2) 臨床的診断のあり方

前述したように個々の要素的な能力を分解して記すことができず、全体の行動発達の流れと

して判断せねばならない以上、発達の欠陥や優劣を心理学者と医学者が各々役割を分担して最終的な診断をするというプロセスには困難がある。またこのような現在一般に行われている臨床診断の過程にはなじみにくいと言わざるをえない。診断に当っては初めから検査者自身が臨床病理に明るくなければならない。たとえば適応行動で小球と瓶の操作をしている小児については、神経病理、身体疾患の病理とあわせて同時に発達心理学の基礎知識と経験を持っていることが前提になる。すなわち検査場面で、子どもを見る目自身が上記の専門的批判力を持っていなければならないことになる。

したがって一般に行われるように、まず小児科医が子どもを診て、その要請で発達心理関係者がテストをして、その知見を参考にして臨床病理的な発達診断をするというようなプロセスは、実地の上では診断上の見落としがあるだけでなく、子どもの行動を評価すること自体不完全なものになり易い。

このように考えると発達診断をするひとには高度の、また臨床・発達心理学、臨床神経学、小児医学をふくむ広範な知識と経験を持つというかなり重い負担が課せられる。

以上のことを考慮するとゲゼルの発達診断を臨床上応用することは現代の簡易なテストのもてはやされる時代にはふさわしいやり方ではないようにも思える。本来臨床の応用が目的である診断法としてはこれは矛盾したことである。ゲゼルの後継者である Knobloch, H. および Pasamanick, B. が試みたスクリーニングはこのような矛盾と困難を克服しようとするものである。

筆者が敢えてこのようにゲゼルの発達診断の現代における問題点を指摘した意図は、ヒトの発達は本来コンピューター社会、電気器機優先の社会に於て、その行動の解釈について、物理的・化学的知識の進歩のみによって分析的に到達できるものではなく、また臨床的に能率の良い評価をするということはその応用に当って大きな限界のあることを述べるところにある。

ヒトについてのゲゼルの考え方は次の句のなかに端的に示されている。¹⁵⁾

「人間はその反射や本能およびあらゆる種類の直接的反応の総和以上のものである。

人間は上記総てのものプラス将来に対する創造的潜在力である。機械論的に考えてみるならば、アムブリストマの胚でさえ、その動物の反射あるいは直接の行動可能性の総和以上のものである。したがって下等動物であろうと、人間であろうと、その個体の真の測定は生物の要素を創造力として含まねばならない。まことに人間は一つのメカニズムである。しかしその限られた生命や感受性および生長の範囲内において、彼自身を創造し操作している一つのメカニズムなのである」。

む す び

ゲゼルの発達観は歴史的な過去のひとつの理論であると考えられる傾向があるが筆者はこれはゲゼルが理解されていない誤りからくるものであると考える。

ゲゼルを理解するためにはひとつの専門分野だけにとらわれていてはならない。医学、発達心理学ならびにその周辺領域の知識と経験が必要である。

本稿ではまずゲゼルの研究を受継いた現代の代表的な研究者の歩みを跡づけて、ゲゼル以後の発達研究を概観した。

次にゲゼルの発達哲学としてヒトの行動発達の全体的・統合的な進展という点から「トーマス」「行動発達の体(corpus)」のことを述べ、ことに行動発達の神経生物学に関する Coghill, G.E.の研究を解説した。

さらに行動発達診断は上記の基本的な立場から考えるならば、表面的な応用上の便利さの点からのみとらえるべきものではなくて、その問題点や利用上の限界をこそ明らかにすべきであり、そのことによってヒトの発達の特自性についてより良く理解できる。

文 献

1. Gesell, A., Knobloch, H., Pasamanick, B. (新井清三郎訳) 新発達診断学, 日本小児医事出版, 1976.
2. Ilg, F.L., Ames, L.B. : Child Behavior, Harper & Bros., N.Y.1955.
3. Gesell, A., Ilg, F.L., et al : Infant & Child in the Culture of Today, 2nd ed., Harper & Row, 1974.
4. Ames, L.B., Learned, J.M.A., Métraux, R.W., Walker, R. : Child Rorschach Responses, P.B.Hoeber, N.Y.1952.
5. 小沢牧子 : 子どものロールシャッハ反応, 日本文化科学社, 1970.
6. Griffith, R. : Abilities of Babies, Univ. of London Press, London, 1954.
7. Bühler, Ch. : Kleinkindertests, 4 Aufl., Springer, Berlin, 1977.
8. Gesell, A. (生月雅子訳), 狼にそだてられた子, 家政教育社, 1967.
9. Gesell, A., Amatruda, C.S. (新井清三郎訳) 行動の胎生学, 日本小児医事出版, 1978.
10. Coghill, G.E. (拓植秀臣編) 行動発達と神経学的基礎, 恒星社厚生閣, 1972.
11. 新井清三郎 : 発達診断の理論と実際, 福村出版, 1980.
12. Ibil, p.67.
13. 「行動の胎生学」 pp. 199-200.
14. Ibil, pp. 239-240.
15. 「発達診断の理論と実際」 p. 67.

On the reconsideration of the So-called Gesell's Developmentalism

Seizaburo ARAI, M.D.

Gesell's theory as to the behavior development is apt to be misunderstood because its fundamental concept about child development is overlooked by the specialists. General textbooks of psychology are apt to deal the theory as out of date. This misconception is, the author thinks, due to the lack of the text writer's knowledge in the field concerned as to the fundamentals of Gesell's theory. The reason of this misunderstanding is partly due to the fact that Gesell's behavior theory should be interpreted interdisciplinarily that is, psychologically, biologically, and also medically.

The author describes the trends of studies by the followers of Gesell's philosophy. Several of basic concepts as to "motion", "tonus", "corpus of behavior", in reference to "The Embryology of Behavior", were described, in addition to the study of neurobiological viewpoint of Coghill, G.E.

The developmental diagnosis is widely applied in clinical practice nowadays, but not always in its true sense. The fact that the anterospective perspectives in the developing child are in fact much variegated, must always be kept in mind, and the clinicians should be cautious in diagnosing a normal as well as defective child.